

## 2 本校が考えるWell-being Educationとは？

Well-being Education（すべての子どものための教育）とは、深谷市教育委員会が平成20年度深谷市学校教育ビジョンで明らかにした「これからの教育が目指すべき方向性」を示す考え方です。

本節では、本校がWell-being Educationの考え方に沿って、特別支援教育の充実やその視点に立った学校教育の推進に関して、どのように考え、どのように実践を工夫し、どのように実践を積み重ねようとしたのか、その考え方を述べます。

### 2.2.1 Well-being Education とは？

「すべての生徒が自分の未来を信じ、希望に満ちて活躍する学校」をどのように構築したらいいのでしょうか。そのためには、どのような考え方に立ち、何に取り組めばいいのでしょうか。

その一つの答えを、深谷市では「Well-being Education（すべての子どものための教育）」という考え方で示し、深谷市学校教育ビジョンで次のように説明しています。



深谷市教育委員会では、特別支援教育の視点に立った教育の推進に取り組んできました。それは、子どもたちの認知と学習スタイルは多様であり、その多様性に応えることこそが、未来を切り拓く鍵だと考えたからです。

これからは、子どもたちの多様性に応じた教育を展開しながら、人と人のかかわりやつながりを大切にし、すべての子どもの将来を思い描き、社会のルールと生きる力を身に付けることができるよう指導し、支援することが大切です。

深谷市教育委員会では、そのような教育を、

### Well-being Education

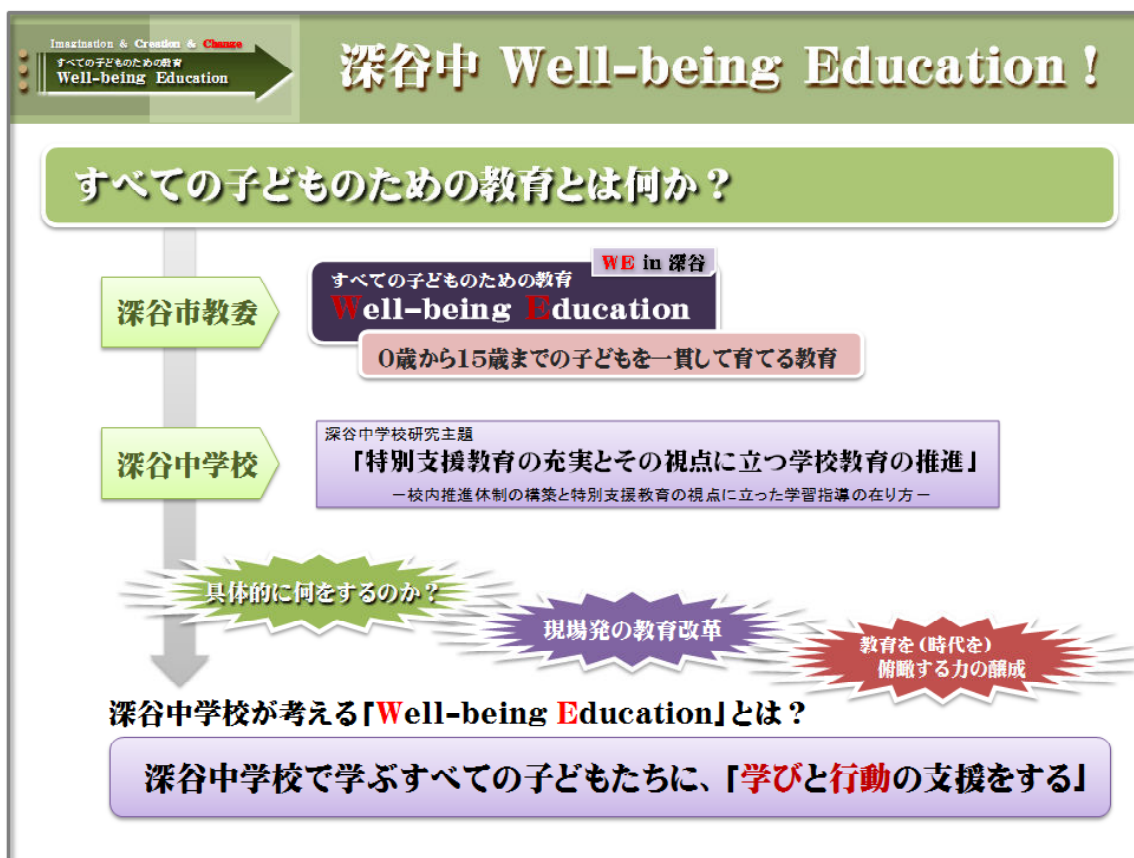
（すべての子どものための教育）

としました。

そして、Well-being Education について次のように述べています。

Well-being Education（「すべての子どものための教育」）とは、自分の未来を信じて勉強や運動に頑張っている子ども、発達につまずきのある子ども、さまざまな生育環境の中で悩みつつも頑張っている子ども、固有の優れた能力を持っている子どもなど、深谷で学ぶすべての子どもに対して、子どものさまざまな特徴を個性として捉え、個々のニーズを把握し、子どもにとって「良好な状態が続く」ように努力することこそが、教育の使命であると考え、深谷市教育委員会が創った言葉です。

## 2.2.2 深谷中学校が考えるWell-being Education とは？



本校では、発達障害の有無にかかわらず、どの生徒もかけがえのない生徒であり、すべての生徒が「生きる力を身につけ自己有用感に満ちた生徒」「社会力を身につけ自立（自律）に向かって努力する生徒」として育ててほしいと願っています。そして、実現は容易ではありませんが、すべての生徒に対して「次の時代を託するに足る大人を育てる教育」により、「子どもが主役の学校」「価値の共創を楽しむ学校」を創ることが重要だと考えています。

生きる力を身につけ自己有用感に満ちた生徒  
社会力を身につけ自立（自律）に向かって努力する生徒

自立

- ① 自分で生活できる
- ② 人に迷惑をかけない
- ③ 人の役に立つ

そこで、本校では、市教育委員会が示している「Well-being Education（すべての子どものための教育）」を研究の基本コンセプトにし、本校で学ぶすべての生徒が生き生きと学ぶことができるよう、「学びと行動を支援する教育」のあり方を追求することを目的として研究を進めることとしました。特に、発達障害のある生徒や二次障害に苦しんでいる生徒には、行動の支援と、その改善を基盤とした学びの向上が不可欠であると考えています。したがって、私たちは、「Well-being Education」という考え方は、「特別支援教育の推進とその視点に立つ教育」と同義であると考えています。

「数値で計れる学力」を身につけることが重要なのではなく、発達障害の有無にかかわらず、すべての子どもが、成長の過程でさまざまな課題や困難に遭遇したときに、困難に打ち負かされそうになりながらもその解決に自らの力で立ち向かい、希望に燃え、未来に向かっ

て、自分の意志で一步を踏み出すことができるよう、その意志と決断を支える知識や行動の仕方を身につけることが重要であると考えています。



本校では、「深谷中学校で学ぶすべての子どもたちに、『学びと行動を支援する』ことが、深谷市がめざす「Well-being Education (すべての子どものための教育) の実現につながる」と考えています。

しかし、「Well-being Education」という理念をどのように実現するのか。そのためにどのようなことに取り組む必要があるのかを模索する過程で、深刻な課題に次々と遭遇し、困惑しながら研究を続けているのが現状です。

思春期を迎え発達障害等に苦しんでいる生徒や、二次障害を発症しそうな生徒の理解と対応。すべての子どもたちが「生きる希望」を抱き、生き生きと唯一無二の人生を送ってほしいと願いつつも、怒りや不安に悩み苦しんでいる生徒に対して必要かつ十分な理解と継続的な支援が不十分であるという現実。課題解決のために必要な発達障害や特別支援教育に対する理解や、目の前で苦しんでいる子どもたちをどう支援するのかといった知識と手法を持ち合わせていない現実直面し、戸惑い、苦戦している状況は今も続いています。

残念ながら、通常の学校の多くの教師は、これまで発達障害や特別支援教育に関心を向けることも少なく、発達障害や特別支援教育について十分な知識と理解を持ち合わせていません。そして、「知識を教える(提供する)ことが中心」という無意識の意識が、発達障害のある生徒を前にしたときに戸惑い、指導方法に悩むなど教育上の混乱を招いています。

また、前述したように、通常の中学校・学級で、発達障害のある生徒と発達障害がみられない生徒を、一つの学級(教室)でどのように指導し育てていくのかということに関して、十



分な知識や情報、指導経験がないのが実情です。

平成21年度の児童生徒の暴力行為が、現在の方式で調査を取り始めた平成18年度以降過去最多という新聞報道は、「Well-being Education」という理想とはかけ離れた厳しく深刻な現実の中で、多くの学校が苦闘していることを想像させます。新聞によると、文部科学省は「規範意識の欠如などが背景にあり、憂慮すべき状況」と述べているようですが、それは表面的な分析でしかありません。暴力行為の半数以上が中学校で起こっているという現実、「思春期を迎え壊れ始める子ども」の増加を示しています。

本校では、「二次障害を防ぎ克服する」ことは、通常の中学校在特別支援教育に取り組む際の重要な意味と価値を含んでいると考えています。さまざまな要因により「何らかの中樞神経系の機能障害」をもって生まれた子どもや、虐待や強いストレスにより脳に影響を受けさまざまな困難性を持った子どもたちが、十分なケアを受けないまま中学校に入学し、学校生活を送っている現実を直視しなければなりません。

研究を進める前提として、

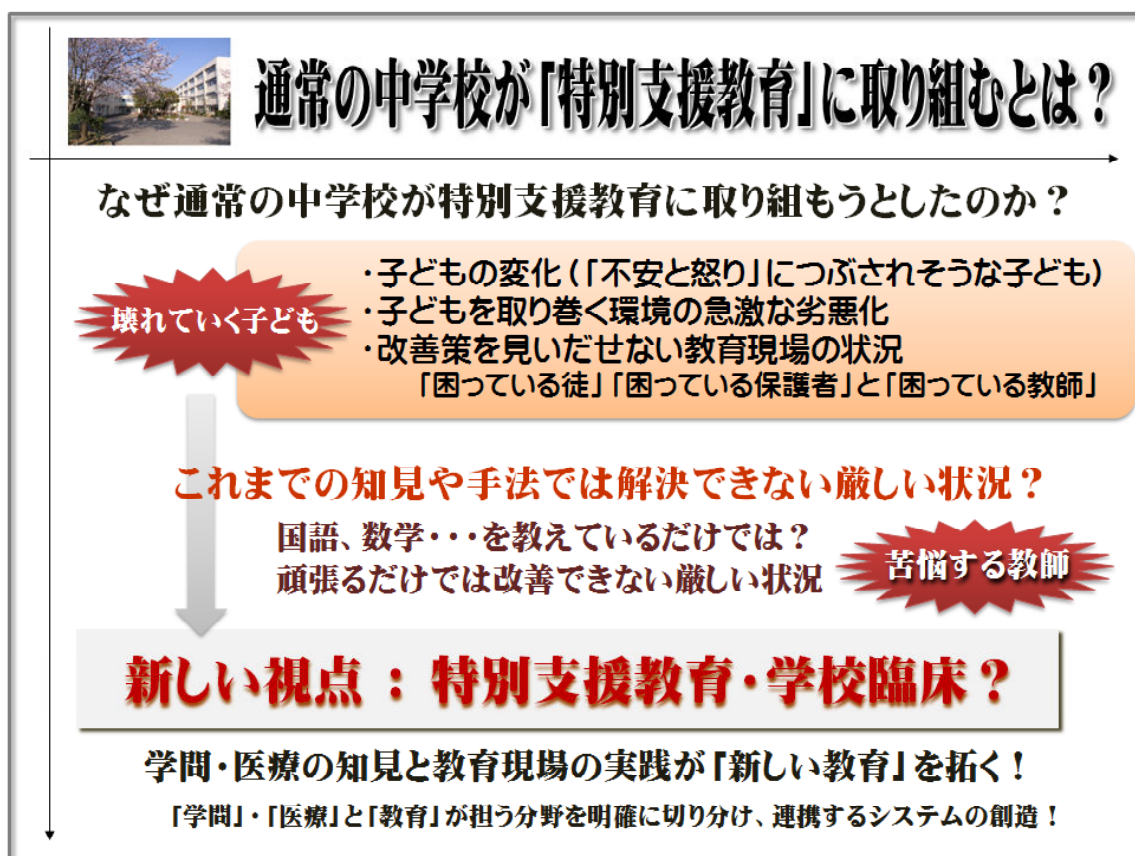
中学生という年代では、周囲の無理解などによって失敗体験が重なり、自尊心が低下して起きるさまざまな二次障害が、一次障害と混在して現れるケースが多いのではないかな？

だから、発達障害を見つけて選別するよりも、学校生活で苦戦している生徒たち（困っている生徒たち）として指導する方が有効なのではないかな？

保護者自身がどうしたらいいか迷い、孤立し、困っているのではないかな？

との考えに立ち、これまで研究に取り組んできました。

### 2.2.3 深谷中学校が考える「学校臨床」とは？



子どもたちは、「言いようのない怒りと不安」に押しつぶされそうになり、暴力行為や不登校などの反社会的行動・非社会的行動などで、自身が抱えている苦しみや耐え難い困難さを表出しています。そして、その原因や背景は一人ひとりの子どもによって違ってきます。

怒りと不安に押しつぶされそうになっている子どもが置かれている状況が個々にまったく違う中で、一律に対応したのでは解決できないことは自明であり、そこに学校現場が深刻な状況に陥っている原因があります。

## 「学校臨床」という言葉を使わざるを得ない厳しい状況！



### 学校臨床学

その薬が有効か否かを実際に投薬などの治療を実施してみて、効果を判定するための医療行為

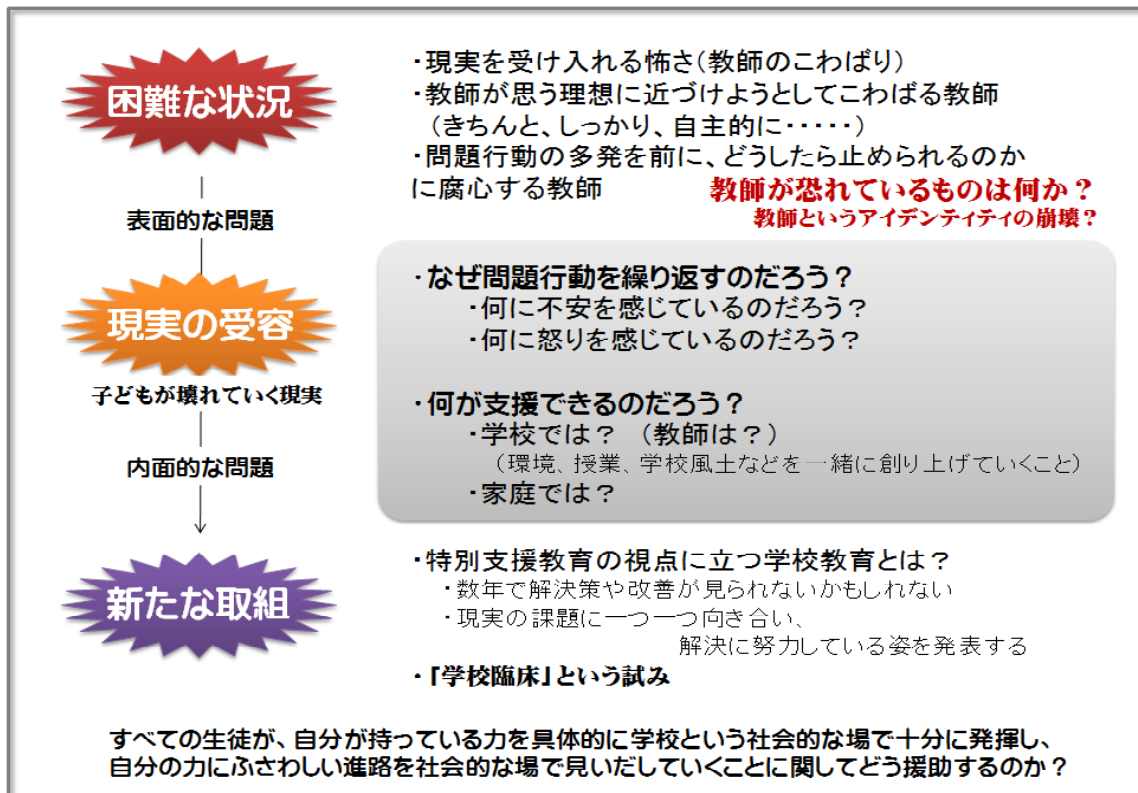
「学校をめぐる様々な問題が生まれる過程の解明とその解決策の探究を、“臨床的”と言われる方法で(ものが起こっているありさまを遠くから眺めて頭の中だけで理屈を考えるのではなく、ものが起こっている現場にできるだけ近づき、入り込み、そこで起こっていることがらを丁寧に観察したり問題解決に具体的に関わったりしながら考えていく方法で)行おうとする新しい学問分野」

## 人間形成の「危機」ともいうべき状況が広まり深まっている 「いらだち」「むかつき」「不安」「恐れ」に苛まれている子ども

【子ども理解】 田中孝彦著 2009.12岩波書店

「なぜ、本校のような通常の中学校が特別支援教育に取り組もうとしたのか？」をはっきりさせておかなければなりません。

それは、「言いようのない怒りと不安」に押しつぶされそうな子どもたちが、私たち大人や教師の想像を超えて増えており、本校がこれまで蓄積してきた知見や手法では解決できない厳しい状況に、「国語、数学・・・を教えているだけでいいのか?」、「人を育てる」と言うことに関して頑張るだけでは改善できないという厳しい現実と直面し、「苦闘し疲弊しつつある状況をどのように改善したらいいのか?」という切実な課題に戸惑い、迫り来る課



題を解決するための「新しい視点」が必要だったからです。

その新しい視点が、「特別支援教育」であり「学校臨床」という考え方です。

新薬の研究開発の世界では、患者の協力を得ながら、新薬が有効か否かを実際に投薬などの治療を実施し、その効果を判定するという医療行為が組織的に数多く行われており、「臨床試験」という言葉は一般的です。

それに対して、通常の学校では、発達障害を持つ生徒や二次障害に苦しんでいる生徒に対する対応や指導を一義的に求めるという傾向があり、課題解決への取組は手探りの状態が続いています。

さらに、特別支援教育の推進や発達障害のある生徒への指導は、大学等の研究者、心療内科等の専門医師、(発達)臨床心理士、教育相談等の専門機関、学校現場の教師などに知見が散在し、十分な連携が取られているといった状況にはありません。また、学問・医療・教育が担う分野も明確に切り分けられておらず、連携するシステムも構築されていません。

子どもたちをめぐるさまざまな問題が発生する過程の解明とその解決策の探求を、“臨床的”といわれる方法で(物事が起こっているありさまを遠くからながめて頭の中だけで理屈を考えるのではなく、ものごとが起こっている現場にできるだけ近づき、入り込み、そこで起こっている事柄を丁寧に観察したり問題解決に具体的に関わったりしながら考えていく方法で)明らかにしようとする「学校臨床」という考え方が、教育が直面している課題解決には不可欠です。

都留文科大学教授の田中孝彦氏は「子ども理解ー臨床教育学の試みー」(田中孝彦著 2009 岩波書店)という著書の中で、「いらだち、むかつき、不安、恐れに苛まれている子どもたちを前に、人間形成の『危機』ともいうべき状況が広まり深まっている」と指摘しています。教育が陥っているさまざまな課題に対して、解決の方策が明確に見いだせていない状況の中では、田中氏の指摘を正面から受け止め、改善に向けて努力することが重要ですが、その入り口が「特別支援教育」であり「学校臨床」ではないかと考えています。

本校が、「特別支援教育の視点に立つ教育」を研究主題としたのは、発達障害や虐待、離婚によるストレス等に苦しんでいる子どもたちが置かれている深刻な状況があり、発達障害や二次障害に苦しむ子どもたちへの指導・支援を適切に行うことが不可欠になっているという現状を、一人でも多くの先生方や保護者に理解してもらい、何とか困難な現状を改善したいとの思いがあります。

本校では、「これからの教育は、これまでの教育の延長線上にはない」との思いから、これからの教育のあり方を考え、その理論や手法を明確にすることが極めて重要だと考えています。「連携」が話題になることが多くなりましたが、それは「子どもたちを人として育てるために必要な連携」という意味であることを、私たち大人は明確に意識しなければなりません。そのためにも、未来の担い手である子どもたちを一貫して育てる連携システムの構築が不可欠です。

「正解が必ず有り、その正解がただ一つ」という無意識の意識

「成功」(努力すれば必ずうまくいく)という結果の呪縛にとらわれている教育実践

「今」の解決に囚われ、「未来」を自分の心と言葉で表現できない大人

子どもたちの困難性を作りだしているのは私たち大人です。

でも、困難な現状を打破できるのも私たち大人なのです。本校は、子どもたちが苦しんでいる状況を改善できるのは、私たち大人(教師)の「意識改革」しかないと考えています。